

安井久善編

安

秋風和歌集

古典文庫

安井久善編

秋風和歌集

古典文庫

昭和四十四年二月十日印刷発行

非売品

秋風和歌集

校者 安井久善

発行者 吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七

振替口座東京二四五九七番

凡 例

- 一、解説において述べるとおり、『秋風和歌集』の伝本は宮内庁書陵部尚蔵にかかる一本だけであり、本書はこれを忠実に翻刻した。
- 二、翻刻にあたっては漢字・仮名とも異体・変体を現行活字に改めたほか、かなづかい、送りがな等すべて原本のままとし、特に疑問の個所は（マ、）と傍注した。
- 三、原本に「みせけち」のある場合は訂正の分のみ翻刻した。
- 四、明瞭な誤写・誤脱は「校注（）」として傍注を加えた。
- 五、便宜上各歌に一連番号を附し、検索に便ならしめた。

秋風和歌集

△宮内庁書陵部本▽

(上卷)

春 上下

夏 上下

秋 上下

冬 上下

釈教

神祇

秋風和歌集 卷第一

春哥 上

たつはるのころをよみはへりける

前中納言さたいへ

一名にたかきあまのかく山けふしこそくもるにかすめはるやきぬらん

建仁の五十首哥合のうた

従二位いへたか

二 あまのはらかすみてかへるあらたまのとしこそはるのはしめなりけれ

前摂政の右大臣にはへりける時人くによませはへりける

百首に山のはやきはるといふ事を

正三位ともいへ

三 いはとやまあまのせきもりいまはとてノ ^抄 あくるくもるにはるはきにけり

はしめのはるのこゝろをよめる 謀子内親王家のみまさか

四 冬こもりこほりにとちしたきつせの せきあへぬをとにはるをしるかな

久安の百首の春哥 大炊御門右のおほいまうちきみ

五 なにはかたいり江のこほりとけにけりノ あしまをわけてはるやたつらん

はやきはるのうたとてよみ侍ける きぬかさの前内大臣

六 きえあへぬいつのゆきまにはるのきて よしのゝやまのまつかすむらん

民部卿ためいへ

七 いとはやも春たちくらしあさかすみ ^抄 たなひく山にゆきはふりつゝ

百首哥よみ侍けるにはるのうた 入道さきの摂政

八 ひさかたのあまのとあけていつる日や ^抄 神代のはるのはしめなるらん

十首哥人ノによませさせ給^{たま}けるついでによませたまける

院のおほみうた

九 かみよゝりかはらぬはるのしるしとてノ かすみわたれるあまのうきはし

後鳥羽院のおほんときたてまつりける百首のはるのうた

さきのおほきおほいまうちきみ

二 かさし^抄おるみわのひはらのゆふかすみノむかしやとをくへたてきぬらん

やまのかすみといふことを

藻壁門院の少将

二 ^{抄ミウ山ノイ本}みわのやまはるのしるしはかすみつゝノしかもかくるゝすきのむらたち

法性寺入道前関白の内大臣に侍けるととき人ノに百首

哥よませ侍りけるにかすみを

二条太皇太后宮のひたち

三 おほひめのをれるころもかはるやまに たちかさねたるみねのかすみは

たいしらす

よみひとしらす

三 ふゆこもりはるたちくらしあしひきの やまにものにもうくひすのなく

四 かすみたつのかみのかたをゆきみれは うくひすなきつはるになるらし

はるのうたのなかに

入道前摂政

五 はるくれはまつさくむめのはなのかに やまのうくひすなきていつらし

入道前摂政のいへの百首にはるの哥

正三位ともいへ

一 ^抄 いまこそはつまこひすらしかすみたつ はるひもくれにうくひすのなく

子日のこゝろをよませたまける

院のおほみうた

七 ねのひせしちよのふるみち例とめて ^ノむかしをこふるまつもひかなん

建仁の五十首哥合のうた

後京極の摂政

八 いにしへのねのひのみゆきあとしあれば ふりぬるまつや君をまつらん

宇治入道前関白しら川にて子日し侍りけるによみはへりける

閑院の贈太政大臣よしのふ

九 春ことにいてにけるかなねのひする ひとのこゝろはまつやひくらん

康保元年の内裏の子日によみはへりける 源のひろのふの朝臣

一〇 いつとなきのへのこまつはかくしつゝ ひとにひかれてとしそへにける

千五百番哥合によませたまける

後鳥羽院のおほみうた

一二 しろたへの衣はる雨かきくもり ふるのゝわかないまやつむらん

わかなをよみ侍りける

入道前摂政

三 けふとてやあさなつむらん雪のころ さはの玉水袖にかけつゝ

かまくらの右大臣

三 春日野とふひののもり今日とてや むかしかたみにわかなつむらん

従二位いへたか

三 打むれてわかなつむのゝはなかたみ このめもはるの雪はたまらす

百首哥よませたまけるにのこりのゆきを

土御門院のおほみうた

三 むもれ木の春の色とや残るらむ あさ日かくれの谷の白雪

岡辺春雪といふことをよみ侍ける 前関白左大臣

三 ^抄はるきてはかつ^{くイ}そもゆらしあは雪の ふれとたまらぬをかのかけくさ

六帖の題にて人々哥よみ侍ける時春野を

民部卿ためいへ

三 ^抄うはかれの草葉はしもに猶さえて はるめきやらぬをのゝふる道

春の哥の中に

小 弁

二 みやこたにはれせぬゆきにおく山の／まきの梢ははるもしらしな

たちはなのとしつなのあそんのいへにて春のゆきといふ

ことをよめる

良暹法し

二 おしきこそはるふるゆきはまさりけれ／花のちるかとみるにつけても

百首の哥よみ侍けるに

恵慶法師

三 ふりしきてきゆるもみえぬみよし野々 みゆきのうへにかすむけふかな

延喜十六年齊院の屏風哥

紀 貫之

三 桜花さくとしらすやみ吉の々 やまにともまつ雪のみゆらん

百番のうた合によませたまける

順徳院のおほみうた

三 ふる雪にいつれを花とわきもこか おる袖にはふはるの梅かえ

人のもとにつかはしける

四條太后皇力太宮の大納言

三 春かせはよにもほへとわかやとの 梅の立枝はとふ人もなし

正治二年にたてまつりける百首の中に春の哥

皇太后宮大夫としなり

三 心あらむ人のとへかしむめのはな かすみにかほるはるのやまさと

梅花衣に薫ということをやよみ侍ける 左近中将のふみち

三 梢にもあらぬたもともにほふなり むめさくやとのよはのあらしに

たいしらす ふちはらのよしたか

三 はるかぜのそらなるほとはむめのはな / こすゑの外もかにゝほひつゝ

あかそめのゑもん

三 みてもかつあはれなるかなむめのはな はるには又やあはしとすらむ

つらゆきはつせにまうつることにやとりけるいへにひさしう

ありてのちまかりてそなりける梅をゝりて花そむか

しのとよみてはへりければうへしあるしのよめる

三 はなたにもをなしむかしにさくものを うへたる人のこゝろしらなむ

右衛門督兼輔のもとに紅梅のえたにつけてつかはしける

刑部卿はるかみ

三 きみかためわかおるやとのむめのはな いろにそいつるふかきこゝろは

こうはいの花のさかりなりけるをおりてつかはしはへり

けるに

中納言のせむし

四 かすみこめかはかりおしむむめの華 いかなるひまにさそはれぬらん

校注(成)

かへし

法性寺入道前摂政

四 ひまもなき霞のまよりむめのはな かはかりにてもいかておりけん

よるの梅といふことをよみ侍ける

きぬかさのさきの内大臣

三 山のはにかすめる月はかたふきて よふかきまとにほふ梅かえ

人くゝに百首哥よませたまけるつゐてにかへるかりの心を

よませたまける

院のおほみうた

三 なにゆへにいさなはれつゝ雁金の ゆきてはかへるならひなるらむ

さきのおほきおほいまうちきみ

四 たかためにこしかりかねときかねとも／かへるはつらき春のわかれち

中院入道右大臣

五 春ことにかりかへるなりふるさとに／いかなるはなのさけはなるらん

堀川院の御ときたてまつりける百首哥にかへるかりを

ふちはらのもととし

六 世中はいつくかいつくかへるかり　なに古郷にいそくなるらむ

やなきをよみ侍ける

大納言やすまろのむすめ

七 うちわたすさはのかはらのあをやきは　いまははるへとなりけらしも

中納言やかもち

八 青柳のいとよりかけて春かせに　みたれぬさきをみむ人もかな

齊宮の女御の哥合

みふのたゝみ

九 あをやきのいとはなひきてよることに　露の玉ぬくをとろなりけり

そか　る力

たいしらす

ふちはらの信実朝臣

十 春は先なひきにけりなさほひめの／そむる手ひきのあをやきのいと

後鳥羽院のおほん時の百首の春のうた 入道前摂政

三 かり人のあたちのはらのしらまゆみ^ノをしてはるさめいくかふるらむ

西園寺入道前太政大臣

三 春雨はよもの草木をわかねとも しけきめくみはわか身なりけり

元久の詩哥合に水郷の春の望といふことを

たいこの入道前太政大臣

三 はるのよはあけのそほふねほのく[〜]と いくやまもとをかすみきぬらむ

詩を哥にあはせたまけるに江上のはるののそみといふことを

よみはへりける きぬかきの前内大臣

三 なにはかた入江もたかくみつしほに うたてかすめる春のゆふくれ

海のはとりのはるの月といふことをよませたまける

校注(原本羽欠)

後鳥羽院のおほみうた

三 なにはかたとへかし人のこゝろあらは 霞にくるゝおほろ月夜を

はるの月をよませたまける

土御門院のおほみうた

矣　ときわかぬなみたにそてはおもなれてノ　かすむもしらぬ春の夜の月

後久我のおほきおほいまうちきみのいへの十五首の哥に

承明門院の小宰相

毛　はるは猶かすむにつけてふかきよの　あはれをみする月のかけかな

百首の哥たてまつりけるときはるの月をよみはへりける

九条前の内大臣

禿　なかめきてとしにそへたるあはれさもノ　身にしられぬるはるのよの月

正三位ともいへ

禿　かすみしくそらとないひそこれはまたノ　はるのときしるおほろ月夜そ

巻第一

秋風和歌集 卷第二

春哥 下

はなのうたあまたよみ侍けるに

きぬかさの前内大臣

㊦ はるかすみたつをみしよりみよしのゝ

山のさくらをまたぬ日はなし

百首の哥よませたまけるに

校注(原本「羽」欠)

後鳥羽院のおほみうた

㊦ やま桜さきにけらしもみよし野ゝ やへたつ雲に匂ふ春かせ

二百首よませたまけるに

順徳院のおほみうた

㊦ さくらはな咲とみしより高砂の 松をのこしてかゝるしら雲

はなのうたのなかに

校注(左カ)
さきの摂政太政大臣

㊦ いこまやまあたりの雲とみるまでに おこしの桜花さきにけり

後鳥羽院のおほんときの百首に

参議まさつね